

《資料》

奈良町触(五)

——奈良町奉行所与力玉井家文書による——

牧 英 正

廳中漫録二二

和州志 触事一(承前、自元禄六年六月至元禄十四年末)

〔一七〇〕 定

- 一 従公儀被立置御高札之趣并切支丹改之儀、弥以穿鑿可仕事
- 一 従先規被仰出御法度書、常々致吟味堅相守可申事
- 一 火之用心無懈怠可慎、風吹申節者猶更無油断可相触之、若火事出来之時者、其一町并隣町之者欠付鎮之、其役之者ハ早速馳集、情を入可消之、不審於有之ハ、或籠舎或可為過料、但、風下之分者可令用捨事
- 一 附、町人百姓杯、刀脇差を帶、火事場え不可出、若不審成者有之ハ相改、及異儀者可搦捕之、武士者役人之外不可出向事
- 一 喧嘩口論又ハ盜賊人杯在之節者、不限昼夜早速可申來事
- 一 附、於町中狼藉無作法仕者在之ハ、奉行所え可相達事
- 一 博奕其外賭之諸負堅令停止之、若相背者有之ハ、其連中并宿主家屋敷可為欠所、親懸りの者は親之家可令欠所、親申出るにをひてハ親之家不及欠所、右之当人ハ或死罪或籠舎追放、科之輕重可依其品事

附、宿之両隣五人組可為越度之間、見分次第可申出事

一 屋作衣類杯美麗を好不致結構、私之奢不可仕、并嫁娶之義応其分限、祝儀取替又ハ道具杯輕可仕事

一 諸寺院町屋を借り、寺法執行吊等仕候儀、堅令停止之、但、寛永九申ノ年以後取立候寺院ハ為新地之間、遂吟味、寺及破損候共為致修覆間敷候、尤寺崩次第たるヘき事

一 神事祭礼并仏事法事吊之儀、仮初にも不好美麗を、万端可致省略、若過分之振舞在之は曲事ニ可申付事

一 借家之者念を入、家可借之、勿論他国より来店借、他町より来店借り、独身之もの迄由来を正し、店請證人慥に立、手形を取可借之、請人なくして一夜之宿も借ヘからず、縦請人在之といふ共、不慥と及見は宿かすヘからず、但旅簗屋之分ハ一夜の宿くしからず、二夜共宿致におひてハ請人を取、其趣町之年寄五人組ヘ可相断事

附、他町え宿替仕者あらは落付所を正し、日用取といふ共、手形取之、大家名主に申達可差置事

一 家屋鋪売買之儀、其町之年寄五人組に達之可相定、縦売券状有之候と云共、年寄五人組無加判におひてハ不可立證文事

附、買論之事売主と相究、町之年寄五人組え断申達上ハ先次第たるヘし、若年寄致依怙は可為曲事事

一 牢人之儀念を入、手形取之可差置、新規之牢人令居住時者、其子細書付可申来、若隱置者有之時ハ可処罪科事

一 諸商売に付て諸敷儀、或座かましき事、或隱密之商売物一所に買置、しめ売杯一切令停止之、若違犯之輩あらハ、当人ハ不及申、其町之年寄五人組月行持迄可為曲事条、常々可致吟味、雖然其所之助になるヘき儀ハ可訴之、子細聞届可申付事

一 問屋之身軀能聞届、互に可致商、不念仕むさと売掛滯儀有之而致訴訟と云共、品により不可令裁許、且又問屋其外諸商人何によらず商物取込、其代銀不相済見届さる者在之ハ、其町之年寄五人組親類縁者立合、遂穿鑿出入にならざる様に可仕、令油断評論に成にをひてハ可為越度、下にて不相済儀は其趣可訴事

一 讓状之事、先妻之親類所之名主年寄之名をしるし、以後評論に不成様に可致覚悟、若又急に差詰り、書付難成にをひてハ五人組仲間を以、名主に、有合候親類縁者立合、道理分明にをひてハ可任其意、非儀成申分取上間敷事

附、養子之儀、是又可為同前事

一 質屋之儀、慥成証人立之、盜物不取置様に急度可遂吟味、若あやしき物持来にをひてハ、其人之出所慥に可承届置、盜物狼に

請取置者在之ハ曲事可申付事

一 古衣類又ハ道具之類、途中にをひて売買一切不可仕候、若盗物と知ながら買取候ハ、可処嚴科事

一 傾城町家居不致美麗、女衣類杯美々敷不可致、尤昼夜ともに他行可令停止、見届さるもの来にをひてハ早々可致注進事

附、傾城屋にをひて喧嘩死人有之候者、死損たるへき事

一 町人に不似合長脇差、たて染の衣類を着、風俗惡者、又ハ商売なと不致渡世仕、あやしきもの有之候ハ、早々名主大家遂詮議、奉行所え可申出事

一 町中にて寄合之節、物毎輕、費に不成様に致へし、諸事依怙鼻肩なく正路に可令沙汰、若非儀申懸る者有之ハ其趣奉行所え可申来事

一 町中道橋損するにをひてハ可加修理、往還迷惑いたさすへからず、常々掃除水遣等念を入可申付事
右之条々堅相守者也

元禄六年酉六月日

飛驒

〔一七一〕 覚

一 今度八王子成就院事、被逐御僉議候処、邪法を執行、正法之妨ニ罷成、不届ニ付而岩城伊予守え御預被仰付候、向後寺社方ニ左様之類無之様急度可申付旨被仰出候 以上

右之通、從御老中寺社奉行へ被仰渡由にて、御書付到来候条、此旨急度可被相心得者也

元禄六四年 八月十八日

飛驒守

興 東 十三ヶ寺 十八ヶ寺 廿一ヶ寺 衆徒 社家 称宜 衆人

円照寺御所 法華寺殿

〔一七二〕

覚

一 火事之節、其場所え火消役人之外一切參間數旨、前以相触候得共、弥此段可相心得事

一 惣而火事之時分、無用もの大勢入込、火消之妨に成候様に及見候之間、向後近き親類之外見舞候儀可為無用候

一 火事場えうろんニ相見え候もの有之者、無遠慮搦捕候間可得其意事

右之通、若於相背は可為曲事者也

西十一月十九日

右之書付、一乗院様大乘院殿并東大寺年預四聖坊迄被遣之候

尤町中えも相触候様ニと惣年寄ニ申渡候 以上

〔一七三〕

覚

一 今度於所々、強盗人巾着切之宿を致候もの、并彼宿に居合候徒者召捕候、於当町も身を持候者に博奕なといたし悪敷ものに付合候者有之風聞候、向後五人組年寄遂吟味、胡参成ものニ付合不届有之は、早速可申出、若隱置候者五人組年寄ハ不及申、一町之者迄急度曲事可申付者也

戌正月日

興 東 町

〔一七四〕

頃日於春日山立木剪採候跡有之候、自今以後役人之外狼入候者有之候者、見付次第捕可遂僉議候、飛驒守留守ニ有之候得共、從一乗院様被仰下候ニ付、如斯相触候 以上

戌六月十六日

番所

社家中 称宜中 町中

〔一七五〕

一 印判彫候儀、外之印判のおし形にて彫候事弥堅停止可仕候、絵本の様ニ書候而、印判誂候共、其ことく少も違なくハ彫申間敷候、何文字を何分四方なとゝあつらへ候分者勿論不苦候、是者若印判を敷写にて誂、似印判不仕為に候間、其旨相心得、窺敷儀者あつらへ候共仕間敷候

右之趣、猥に仕、似せ印判なと有之候者、僉議之上曲事たるへき者也

戊九月 日

右之御書付、十月廿五日御書、江戸より御奉行被仰下、奈良町中斗え相触候様ニとの儀ニ付、町年寄町代共之御書付相渡候 以上

戊十一月二日

〔一七六〕

口触之覚

一 惣而生類御憐ニ付、魚鳥共に生ケ物之類、向後商売可為無用事

一 金魚銀魚、面々所持仕候もの之候ハ、猿沢之池へ放可申候、左候者何足はなし候と番所へ可申来事

戊十二月

右之通、口触ニ致させ候様ニと被仰出、惣年寄町代ともへ申渡候、奈良町中触させ候 以上

戊十二月廿六日

〔一七七〕

口触

一 春日御社釣燈籠、前々々数度盗取候、近頃も兩度迄盗候ニ付、御寺務々強ク遂御僉議候、当町中者不及申、八ヶ村共ニ急度僉議可仕候、当二月朔日同七日兩度ニ盗取候釣燈籠之年号施主之名彫付在之候書付尅通披見、此通相心得、僉議可仕候、尤胡参成ものも候ハ、早速可申出候、隠し置後日あらハれ候ハ、其所之名主年寄まで急度曲事ニ可申付候也

亥二月九日

春日社之失セ候燈籠ニ彫付候書付

延宝四年五月吉日

預り称宜

一 釣燈籠 施主岩井九右衛門

若宮弥右衛門

寛文六年十二月吉日

預り称宜

一 釣燈籠 施主土屋右左衛門

北郷喜太夫

寛文六年二月吉日

預り称宜

一 釣燈籠 施主和田織部

南郷新十郎

以上

亥二月九日

右式通、奈良町中相触候様ニと則書付惣年寄町代共へ相渡申候

〔二七八〕

一 村々所により芝居物、番所え不相断隠し候而仕候由相聞え候、向後番所えも無断芝居物仕候者可為越度候、其旨相心得、村々不残相触者也

亥二月廿一日

南都番所印

添上郡 庄屋

年寄

右順々ニ相廻し、村々庄屋年寄判形いたし、留り之村へ返し可申候 以上
右芝居物之御触、和州十五郡相触之、但し十五通也

〔二七九〕

覚

一 知行所并支配之町ニ惡敷秤有之由相聞え不届ニ候、縦善四郎方が仕出候秤ニても、後に拵直し惡敷秤遣申者有之者、穿鑿之上急度可申付候間、此旨相心得、惡敷秤堅遣間敷候 以上

亥二月十五日

神飛驒守印

右御触之趣、慥ニ承届申候、知行所并支配之町中、家持者不及申、借屋店借り地かり召仕等迄為申聞、此旨急度相守可申候、若相背、惡敷秤遣申候敷、又へ善四郎方が仕出し候秤ニても後ニ拵直し遣申もの於有之者、如何様之曲事ニも可被仰付候、為後日知行所百姓連判之一札差上申候、仍而如件

與 東 社家 称宜 衆徒 衆人 十三 十八 廿二

円照寺御所 奈良町中

〔一八〇〕

覚

一 熊猪狼のたくひ、縦人に喰かゝり不申候とも、人々養置候馬牛犬猫鶏などの鳥獸表損し可申牀に候へ、追払候得而損さし不申候様ニ可仕候、若追払候節、先え当り死候分ハ不苦候事

一 犬猫たとへハ鳥獸を損さし、或ハ友々喰合候ハ、いたまざる様に引わけ可申候事

以上

五月廿六日

右縦公儀之御書付、相触候様ニと飛驒守方が被申越候ニ付如此候 以上

〔一八一〕

覚

従前々奈良於町中、むさと仕候者ニ宿不致様ニ申付置候処、頃日博奕打野郎遊女之致宿候様に相聞候、向後猥ニ人宿仕間敷候、無抛子細於有之は、町之年寄并五人組え相断可差置候、年寄五人組方ニ左様之品有之は、其近所之町代共え相達可差置候、此旨相背隠置候者、其者は不及申、一町之者迄越度可申付候 以上

元禄八亥年八月四日

飛驒

奈良惣年寄

町代

右之通江戸へ御書付到来ニ付、則川崎長左衛門木村宇右衛門与力立寄、惣年寄町代共ニ御書付相渡候 以上

亥八月十三日

右之文言ニテ興福寺東大寺へも一通ツ、写遣候 亥八月十八日

〔一八二〕

覚

一金銀極印、古ク成候ニ付、可吹直旨被仰出候、且又近年山より出候金銀も多ク無之、世間之金銀も次第ニ減可申ニ付、金銀之位を直シ、世間之金銀を多ク成候ため此度被仰出候事

一金銀吹直シ候付、世間人々所持之金銀公儀へ御取上被成にてハ無之候、公儀之金銀先吹直させ候上にて、世間之可出之候、到其時、諸事可申渡事

右為心得、先達而申聞候 以上

亥八月七日

右之通先頃從御老中御出し候ニ付、御書写被遣候、八月晦日之御書ニ被仰下、右之段惣年寄町代共迄ハ可申聞旨ニ付、早速為申聞候 以上

元禄八亥九月十日

〔一八三〕

覚

一 今度金銀吹直被仰付、吹直り候金銀段々世間へ可相渡候之間、有来金銀と新金銀と同事ニ相心得、古金銀不残吹直り候迄ハ新金銀と入交、遣方請取渡兩替共に無滞用可申候、上納金銀も右可為同前事

- 一 新金銀座銀座より出之、世間之金銀と可引替候、其節金銀共に員数を増可相渡事
- 一 金銀町人手前より引替に成候間、武家方其外之金銀勝手次第、町人へ相對にて相渡引替可申事
- 附、古金銀貯置不申、段々引替可申事
- 右条々国々所々に至ても可存此旨者也

亥九月

右之趣自飛驒守被申趣候同、如此候 以上

亥九月六日 番所

。興。東。社家。称宜。衆徒。衆人。十三。十七。廿二。奈良町。八ヶ村
円照寺御所 法華寺殿

〔一八四〕

定

- 一 従公儀被建置御高札之趣并切死丹宗門之儀、弥以可穿鑿事
- 一 従先規度々被仰出御法度書、常々致吟味堅可相守事
- 一 従前々被仰出候生類憐之儀、弥相守可申事
- 一 火之用心無懈怠可慎、風吹申節者猶又無油断可相触之、若火事出来之時は其一町并隣町之者かけ着鎮之、其役之者ハ早速馳集、人情可消之、不參於在之ハ籠舎、或ハ可為過料、但、風下之分ハ可令用捨事
- 一 附、町人百姓坏刀脇差を帶、火事場え不可出、若不審成者有之ハ相改、及異議は可搦捕之、武士ハ役人之外不可出向事
- 一 喧嘩口論又ハ盜賊人抔有之節ハ、不限昼夜早速可申来事
- 一 附、於町中狼藉もの之ハ、奉行所え可相達事
- 一 博奕其外賭之諸勝負堅令停止之、若相背者有之ハ、其連中并宿主家屋鋪可為欠所、親懸之者ハ親之家可令欠所、親於申出るにハ親之家不及欠所、右当人ハ死罪或ハ籠舎追放、科之可依輕重事

附、宿之両隣五人組可為越度之間、見聞次第可申出事

一 屋作衣類杯美麗を好不致結構、私之奢不可仕、并嫁娶之儀応其分限、祝儀取替し又ハ諸道具杯輕可仕事

一 諸寺院町屋を借り寺法修行吊等仕儀、堅令停止之、但し元禄五申年五月、敝有院樣就御法事新地御免被仰出、其以後取建寺院停止之事

一 神事祭祀并仏事法事吊之儀、仮初にも不好美麗、万端可致省略、若過分之振舞有之ハ曲事可申付事

一 借屋之者、念入家可借之、勿論從他国来店借、他町より来店借、独身之者由来を正し、店請証人慥に立、手形を取可借之、請人なくして一夜之宿も不可借、縱雖請人在之、不慥者及見ハ宿借ヘからず、但旅籠屋之分ハ一夜之宿不苦、二夜も致宿にをめてハ請人を取、其趣町之年寄五人組え可相断事

附、他町え宿替仕者あらハ落着所を正し、日用取といふとも手形取之、大屋名主に申達可指置事

一 家屋敷売買之儀、其町之年寄五人組達之、可相定、縦売卷狀雖有之、年寄五人組於無加判者不可立証文事

附、買論之事、売主と相究、町之年寄五人組え断申達上ハ先次第たるヘし、若年寄致依怙は可為曲事

一 牢人之儀、念入手形取之可差置、新規之牢人令居住時は其子細書付可申来、若隱置者有之ハ可処罪科事

一 就諸商売珍儀或ハ座かましき事、或ハ隱密之商売物一所買置、しめ売杯一切令停止之、若違犯之輩あらハ当人ハ不及申、其町之年寄五人組月行事まで可為曲事間、常々可致吟味、しかりといへとも其所之助に可成儀者可訴之、子細聞届可申付事

一 問屋之身軀能聞届可致商売、不念仕むさと売懸滯儀有之而致訴訟といふとも、品により不可令裁許、且又問屋其外諸商人何によらず商売取込、其代銀不相済見届さるもの有之ハ、其町之年寄五人組親類縁者立合、遂穿鑿、出入にならざる様に可仕、評論ニ於成は可為越度、下ニ而不相済儀は其趣可訴之事

一 讓狀之事、夫妻之親類、所之名主年寄之名を驗し、以後不成諍論様に可致覚悟、若又急に指詰、書付難成にをめてハ、五人組仲ヶ間を以名主に達し、在合候親類縁者立合、道理分明にをめてハ可任其意、非儀なる申分取上問敷事

附、養子之儀、是又可為同前之事

一 質屋之儀、慥成証人立之、盜物不取置様に急度可遂吟味、あやしきもの於持来者、其人之出所慥可承届置、盜物乱に請取置者

在之ハ可為曲事

一 古衣類又ハ道具の類、於途中売買一切不可仕、若盜物と知なから買取候ハ、可処嚴科事

一 傾城町家居不致美麗、女衣類杯美々敷不可致、尤昼夜共ニ他行可令停止、見届さるものをゐてハ早々可致注進事
附、傾城町にをゐて喧嘩、死人在之候とも死損たるへき事

一 町人に不似合長差脇、たて染之衣類を着し、風俗あやしきもの、又ハ不致商売も渡世仕、不審なる者在之ハ、早々名主大家遂
僉議、奉行所え可申出事

一 町中にて寄合之節、物毎軽く費に不成様にいたし、諸事依怙最良なく、正路に可令沙汰、若非儀申懸もの之ハ、其旨趣奉行
所え可申来事

一 町中道橋於損者可加修覆、往来迷惑不可加為致、常々掃除水遣杯入念可申付事

右之条々堅可相守者也

元禄九丙子七月日

伝左 印

彦右 印

奈良町惣年寄

町代

〔一八五〕

覚

一 吹直之金銀段々出来寄候之間、誰人に不依、所持之古金銀兩替屋方え聞合、無油断新金銀と引替可被申候、吹直新金銀出来候
上ハ古金銀通用可為停止候間可被存其旨候、次はいふき銀も吹直シ候間、同前ニ可被心得候 以上

子七月九日

右之通從公儀被仰出候間、急度可相守候 以上

子七月廿五日

妻木彦右衛門

印判無之

興 東 衆徒 社家 称宜 楽人 十三 十八 廿二 町中 八ヶ村
円照寺御所 法華寺殿

〔一八六〕

今度江戸本郷ニ而金銀吹直し場所之外、一切金銀吹直申間敷候、自然脇々ニ而吹直候もの有之歟、又者似セ金銀拵作もの有之ハ早速訴人に出へし、縦同類たりと云とも其科を免し、急度御褒美被下、其上あたをなさる様ニ可申付之、若隠し置、後日外ハ顯るゝにおゐてハ、其身ハ不及申、親類并所之もの迄可為曲事者也

子七月日

右之通従公儀被仰出候間、面々知行所え急度可被相触候 以上

子八月廿二日

妻木彦右衛門

右十三ヶ所

〔一八七〕

一 酒酔、心ならず不届仕候もの粗有之候、兼而より大酒仕儀停止候得共、弥以酒給候儀、人々可相嗜事

一 客杯有之候而も、酒強候儀無用事

附、酒狂之者有之候ハ、酒給させ候者可為越度事

一 酒商売仕候もの連々減候様可仕事

右之通急度可相守候、於令違背者可為曲事者也

子八月日

右之書付、従江戸令出来候、町中可触知者也

是ハ惣年寄町代え渡ス奥書也

子九月五日

妻木彦右衛門

右十三ヶ所へ触知之

〔一八八〕

覚

一 平之布

長六丈八尺五寸

大工曲尺ニ而

幅老丈貳寸三分

一 よりの布

長六丈六尺

大工曲尺ニ而

幅老尺二寸三分

右之通、前々より布尺幅定置候処に、近年幅せはく、公儀え被御召上候御晒布御用ニ難立候間、来十一月ノ幅せはき布、判場え持参候共、入念致吟味、検印押申し候事

一 来ル十月ノ右定之通、布織立可申候、但シ是迄織立置候生布并晒置候布、来年丑五月迄ニ商売可仕事
右之通相守可申候、若於相背可為曲事者也

元禄九丙子年九月七日

惣年寄清水源蔵、町代ともニ申渡候

〔一八九〕

一 晒置候布商売無油断致し、此度申渡候寸法之布と不紛様ニ可申付候、来丑之五月月ニ売払申様ニ申渡候へとも、商売無之時者難儀可申候間、追而如此候 以上

子九月日

右之通同八日被仰出、惣年寄町代杯へ書付相渡し、町中之ものともえ申聞候

〔一九〇〕

頃日方々ニ捨子多候、其所之者并番人共油断故右之通候、向後捨子無之様ニ互ニ入念可申候、若子捨候者相知候ハ、可申来候、急度曲事可申付候、隱置脇より相知候ハ、其所之もの可為越度候、不及申捨子見付候ハ、只今之通致養育、早々此方之可申出候 以上

子九月十五日

右之通奈良町中相触可申旨被仰出、則惣年寄清水源藏、町代え書付相渡しふれさせ候

〔一九一〕

覚

昨十日に鎌四千被取候もの有之候、昨今迄ニ預リ候歟、又ハ買取り或ハ質物ニ取候もの有之候ハ、御番所え持参可仕候、隱置脇より願候ハ、可為越度者也

子十月十一日

番所

興福寺 東大寺えハ承仕呼寄申渡候

〔一九二〕

覚

一 平之布

長六尺八尺五寸

幅壹尺貳寸三分

大工曲尺ニ而

一 縷之布

長六丈六尺

幅壹尺次寸三分

大工曲尺ニ而

右之通先規より布尺幅定置候処、近年幅せばく公儀え被召上候御晒御用ニ難立候間、向後前々定之幅ニ織立商売可仕候、若相背幅せばの布織出し、他国え商売仕候由、脇より相知候ハ、其人越度可申付もの也

子十月十四日 南都番所

大和十五郡ふれ

〔一九三〕

一 奈良近在所之所々にをめて米問屋と名を称し、有米無之して席を構、日々寄合米之相場を立、札斗をもつて売買いたすもの相聞へ候、右商売之仕方、実なき事にて不宜儀候間可為停止事

附、八木に限らず、いつれの穀物、其外諸色之商売物たりといふとも可准此旨事
右之条、急度相守へし、若令違背之輩於有之者可為曲事者也

丑五月十日

内伝左衛門 印

在江戸 妻彦右衛門

。興福寺 。東大寺 。衆徒中 。社家中 。称宜中 。衆人中 。円照寺御所 。法華寺殿 。奈良町中 。十三ヶ寺 。十ヶ寺 。廿一ヶ寺

〔一九四〕

上大和国知行所付 知行覚

何寺末 何寺

一 大和国 何郡之内

何村 何村 何村

月日

山号 何寺印

今度国図繪御改ニ付、寺社領郡付并村数書付相添、井上大和守方え差出候筈ニ候間、別紙書付之通相調、当月十九日迄之内、南都奉行所え可被差出候、知行之高付者入不申候、廻状留り可被返之候 以上

六月十六日

内伝左衛門

。興福寺 。東大寺 。衆徒 。社家 。衆人 。称宜 。十三ヶ寺 。十八ヶ寺 廿一ヶ寺
。円照寺御所 。法華寺殿

〔一九五〕

覚

金銀吹直ニ付、古金銀者新金銀と弥引替可申候、御領者御代官、私領ハ地頭より申付、到遠国迄、古金銀不残様に引替させ可申候、古金銀之儀、来寅三月迄ハ只今之新金銀と一樣ニ用之、其以後者古金銀通用相止之、新金銀斗可用之間可存其旨候、若滞儀有之候
(脱文カ) 吹直之場所迄可申出候 以上

丑四月日

如斯御書付出候間、写置之可被得其意候、尤各知行所えも右之趣可被申付候、順廻候而留りより南都奉行所え可被返之候 以上

六月十九日

内伝左衛門

興福寺 東大寺 十三ヶ寺 十八ヶ寺 廿一ヶ寺 社家 祢宜 衆人 衆徒
円照寺御所 法華寺殿 町寺 町

〔一九六〕

大仏殿營作ニ作、諸用之請負人、近在或他国が当所へ相越滞留有之もの候ハ、其宿仕候者が勸進所へ相断、紛なきにをめてハ可任其旨候、断なくして二宿も宿仕候ハ、可為曲事旨、町中え可被申触候 以上

右之趣書付を以被仰出、口上ニ而惣年寄町代え申渡シ候様ニと岸瀬左衛門を以被仰出、惣年寄町代并興福寺東大寺下町えも承仕呼寄、口上ニテ申渡候 以上

丑七月十三日

〔一九七〕

覚

一 今度新金ニテ式朱判出来、世間え相渡候、通用自由のために候間、国々所々迄其旨を存、商売請取方渡方無滞、式朱判をも用可申候、式朱判ハ老分判之半分之積たるへき事

一 大判小判老歩判、勿論有来通通可仕候

一 前々相触候通、似せ金銀仕者在之は訴人に出へし、縦同類たりといふ共、其科をゆるし急度御褒美被下、あたをなさるやうに可申付候、惣而金銀の細工仕ものは其所にて心を付、少もうたかハしき義を見及聞及候ハ、早速可申出、隠置外あらへるゝにをめては、本人ハ不及申、諸親類所之者迄可為曲事者也

已六月日

右之通被仰出候間可被守其旨候、勿論各知行所えも可被相触候、廻り留る南都奉行所え可被返之候 以上

七月十八日

内伝左衛門

興福寺 東大寺 社家 祢宜 楽人

衆徒 十三ヶ寺 十八ヶ寺 廿一ヶ寺

円照寺御所 法華寺殿 町中 町無知行寺

〔一九八〕

覚

一 頃日町方にて少々小盗いたすもの有之由相聞候、町々番人油断故たるへく候間、無懈怠切々相廻り可申候、不審成者在之におゐては捕召連可参候、若見のかしに致し候へ、番人ハ不及申、町々年寄月行事迄可為越度候間、番人え堅可申付事

一 不見馴非人、町内え来候者、遂吟味、町送りに致可遣之、其分にて町内に不可差置事

右之通、町々可存其旨候 以上

八月三日

惣年寄町代ニ申渡候

右之通、興福寺東大寺え承仕呼寄、御書付写させ申候、并一薦代妙喜院呼寄、春日山ニ非人徒者隠れ居不申様ニと申渡候 已上

〔一九九〕

覚

一 酒商売人多ク、下々猥ニ酒を吞、不屈成儀共仕候ニ付、今度酒運上ニ応し、酒之直段高直に成、下々酒多ク給不申積、就夫酒

屋掛り候分ハ其通候事

一 運上之儀、江戸井御領ハ公儀え相納、私領方ハ地頭へ可取立候事

一 運上之員數、只今迄酒商売値段五割程も高直に成候積運上取可申候、酒善惡に應し直段高下雖在之、少々過不足ハ不嫌、大概右之通取立可申事

一 江戸者御用相達候御酒屋共之内四人、右之改并運上取立申答ニ候、在々は御代官より相改、手代相廻し運上取立申答ニ候、但、酒屋家數多き所ハ御代官手代斗ニ而ハ改委細ニ難成ニ付、其所々酒屋之内一兩人歟三四人程も酒屋數に應し改并運上取立之段を申渡し取立候之事

一 運上取立候役義申付候酒屋ハ手代など指置、其儀ニ付入用等、懸り候錢を以失却無之、少々徳分有之様ニ入用取せ申積候間、私領方にて其心得可有之事

一 右改并運上取立て之段相勤候酒屋も、自分造り候酒之運上ハ人並ニ出し可申事

一 運上之儀、造酒屋斗取立、請売之酒屋ハ不及運上候、たとへハ他領之造酒屋ハ請売仕候酒屋在之候ハ、何方ハ請売候哉、買本を聞届、売せ可申候、何之道にも弥重ニ不成、運上取落も無之様ニ可有吟味事

右之通、為心得書付改仕候、御酒屋共指出候覺書別紙ニ有之候 已上

丑十月

乍恐書付表以申上候

一 半切 八ツ 一 壺代桶 貳ツ 一 三尺桶 貳ツ

一 四尺桶 五ツ 一 六尺桶 壹ツ 一 溜桶 五ツ

一 酒舟 壹ツ 一 大釜 壹ツ

右之諸道具ニテ酒百五十石迄出来仕候、此上多造申候者ニハ石高ニ應し道具數を増、尤其人々之造り高承届置、勿論三尺桶四尺桶壺代桶此三色ニ焼印仕候而相渡し可申候

一 右之道具、相改渡し申候上ハ相違無御座様奉存候得とも、弥少ニ而も紛敷儀不仕候様ニ五六日間を置、手代式人宛、所々改

ニ廻し、酒一仕舞之石高を見届、帳面ニ付、其人々之判形を取置可申候

一 酒高多造り候者ハ手廻し早仕候間、度々改めニ廻し可申候

一 年々酒造り仕舞申候節ハ、酒舟ニ封を付置可申候

一 会所を拵、手代之者式拾五人にて為相勤可申候、尤右之者は御後闇儀不仕候様ニ誓紙致させ急度可申付候

一 御当地造り酒屋、凡何百何拾軒 但、唐人ニ付酒大積何程宛造り候

凡酒高何万何千石何百石程

此代銀何千何百石程、 只今迄商売値段平均唐升ニ付何ほとつゝのもり

同銀高何ほと今度増値段、但五割増ニ積り

右之銀高ニ応し

御運上銀何ほと

金ニハ何ほと

右之通積り仕差上申候 以上

元禄十年丑九月

御酒屋 利兵衛

同 八左衛門

同 治左衛門

同 忠助

右之書付、岸瀬左衛門を以被仰出候、今度酒屋運上之儀被仰出候間、様子之儀ハ萩原近江守エ可承合由、土屋相模守殿妻木彦右衛門エ被仰渡候、依之近江守ハ彦右衛門開合候処、江戸ニ而酒屋改様之書付式通、近江守相渡候、但、右両通之書付被仰出之書付ニテハ無之候事ニ候故、覚書ニ而候由ニ候、委細之儀ハ猶追而從江戸可申来候へとも、右之趣当初酒屋共為心得先可申聞由、惣年寄共ハ可被申渡候、且又興福寺東大寺両下之儀も五師役者年預へも口上ニ而可申由被仰出候 已上

丑十月十六日

〔二〇〇〕

仙洞之力宮、一昨廿二日薨去、依之今廿四日夕明廿五日夜迄、鳴物音曲普請令停止之由、奈良町并興福寺東大寺えも可被申渡候

丑十月廿四日

右之御書付、廿四日之朝、岸瀬左衛門を以被仰出、惣年寄町代呼寄、右之趣相触候様ニ被仰出候旨申渡候、興福寺東大寺承仕呼寄、右之趣五師役者年預え申達候様ニ被仰出候旨申渡候、遠方之寺社方へハ間も無之事故、相触候ニ不及候旨被仰出候 以上

〔二〇一〕

今度酒屋運上之儀被仰出候、依之江戸御酒屋共四人之内、京大坂奈良堺伏見酒改之儀も、其所之者差加り相改咎ニ候間、可被得其意事

一 寺社領同門前町などに在之酒や運上之儀、御領者公儀え相納、私領者地頭へ致受納、寺社えハ所務無之咎ニ候付可被存其旨事
一 請酒屋者運上出シ不申候事

一 前々之通、酒石高造可申候、只今迄造込候酒石高書付、改役之方え差出シ候様ニ可被申付事

右之通ニ候間、各新下造酒屋在之面々者可被申付候、江戸改役人之内へ奈良酒やさぬきや兵助岩井九右衛門加役可相改候間可被得其意候 以上

丑十一月十八日

内伝右衛門

東大寺 興福寺 衆徒中 社家中 十三ヶ寺 十八ヶ寺 廿一ヶ寺
町中

円照寺御所御役入中 法華寺及御役者中

最前申聞候通、酒屋運上之儀被仰出候間可存其旨候、依之江戸より下り候酒屋改役人さぬきや兵助岩井九右衛門差添可相改候間、得差図可得其意事

一 請酒屋、ハ運上出シ不申事

一 酒屋高、前々之通造り可申事

一 昨今迄造込候酒屋高書付、改役之方え可差出事

丑十一月十八日

右ハ奈良町御触書ニ付、惣年寄町代へ十一月十八日相渡申候 以上

〔1101〕

覚

一 南都町中并寺社領有来酒屋とも、造酒屋運上取立役人讃岐や兵助岩井九右衛門申付候、江戸酒改役人四人之内へ差加り、石高有酒員数等可相改候条、明廿三日手掻今小路町井筒屋勝九郎方迄相越可任差図事

一 古酒新酒共ニ不残書付、印判可持参事

一 先月廿六日船積ニ出し候酒之員数も書付可差出事

一 造酒屋の外え預ケ置酒在之候ハ、是又所持之員数可書加事

附、造酒屋より酒預り候者有之候ハ、其主へ可戻候、若隠置重而令露見候ハ、吟味之上、預ケ主預り主共ニ可為越度事

一 前々造候酒屋、近年酒休不造在之候ハ、是又右会所え印判可持参事

一 古酒新酒共ニ直段上ケ候儀、運上出シ候分者向後直段可上之候、其値改役人可受差図事

右之通町中并寺社領酒屋ともえ可触知之者也

丑十一月廿二日

内伝左衛門

興福寺 東大寺

右承仕呼寄御書付相遣可申候

奈良町中

御名御印なし

〔二〇三〕

覚

一 最前申触候通、寺社領有来酒屋共造酒改運上取立役人、当所請岐や兵助岩井九右衛門申付候、江戸酒改役人四人之内え差加り、石高有酒員数等改候条、来ル廿九日奈良町之内手搔今小路町并簡屋勝九郎方迄相越可任差図

附、来ル廿九日之改之間ニ不合候分へ、来ル晦日来月朔日迄ニ可相越事

一 古酒新酒共ニ不残書付、印判可持参事

一 先月廿六日船積ニ出シ候酒之員数も書付可差出事

一 造酒屋の外え置候酒在之候へ、是又所持之員数ニ可書加事

附、造酒屋より酒預り候者有之候へ、其主へ可戻之、隠置令露見候へ、吟味之上、預ケ主預りぬしともニ可為越度事

一 前々造候酒屋、近年酒休不造者有之候へ、是又右会所へ印判可持参事

一 古酒新酒共ニ直段上ケ候儀、運上出シ候分へ向後直段可上之候、其段改役人可受差図事

右之通各寺社領酒屋共え可被触知候、但、是迄酒株持候而休居申候者尤造酒仕候もの、又ハ株を分ケ造らせ候ものいつれの道にも、不残井簡屋^{（やう）}庄九郎方へ、右日限之通可被参旨早々可被申付候 以上

丑十一月廿六日

内伝左衛門

・十三ヶ寺 ・十八ヶ寺 ・廿一ヶ寺 ・楽人中 ・衆徒中 ・社家中 ・称宜中

〔二〇四〕

去月廿七日、京都高瀬川筋四条下ル式町目市之町松屋清左衛門と申十三歳成候ものを下人長兵衛切殺し金銀銭取立退候

長兵衛人相

一年十八 すミ前髪

一 せい中之男 肉あひふとり候

一 面駄頭も長 色黒し

衣類

一 木綿ねすミ色小紋布子 裏浅黄

一 木綿紺の古単物

一 木綿古下着

一 木綿嶋帯

一 浅黄きやはんぼたん付

取逃

一 金十兩

一 銀七百目

一 錢三貫文

右之通候間、長兵衛儀京都立退、若当所ニ隠れ居候儀も可有之候、又形をかへ候儀も難斗候、重罪之ものに候間、見あひ次第可召捕来、人たかひにても其誤有間敷候間、うたかはしきもの有之へ其所に留置、奉行所え可訴之、自然隠置外よりあらはるゝにをゐてへ、其所之年寄五人組まで可為越度者也

丑十二月朔日

興福寺五師役者 東大寺年預中 十三ヶ寺 奈良町中

丑十二月五日 御書付を以、惣年寄町代ともへ被仰出候覚

〔110五〕

一 奈良町中請売之酒屋共、未給所方にて酒改無之ニ付、給所方致請酒商売仕之由相聞え候、造酒屋之もの共、運上差出ス管に

候処、右之通ニテハ可令難儀之間、当町之造酒屋手前ノ請酒いたし商売可仕候事

附、造酒屋之者とも方ノ致請酒、相応ニ利銀加之、於致商売ハ受酒屋之もの共も損銀在之間敷事

一 未酒改無之給所方ノ酒持来、当町ニ而致商売もの之之候へ、致吟味可追返之、若其段不承引候へ、其所ニ留置、奉行所へ可達之事

一 受酒屋之者共、此後給所方ノ酒請来、当所ニ而致商売儀令停止候而、造り酒屋之ものとも手前ノ夫々ニ可吟味事

右之通奈良町中造酒屋并請酒屋之ものとも可相守之候、若於令違背ハ可為越度之旨可触知者也

丑十二月五日

〔二〇六〕

京都町人松屋清左衛門表切殺立退候下人長兵衛儀、東海道見付宿ニテ召捕、一昨九日上京之由申候間、左様ニ可被相心得候 以上

丑十二月十一日

内伝左衛門

興福寺 東京寺 十三ヶ寺 町方

〔二〇七〕

油坂村領之内、用水え池之三歳斗之男子、沈置候を村之鹿追、昨六日見出シ、庄屋年寄注進申ニ付、検使遣候処、三四日も過候
 躰にて賤敷もの、悴と相見へ候由ニ候、急度可遂僉議候へ共、手掛りもなき儀故無其儀候、若かたしろニ而も存候者在之候者可
 申来、褒美可為取之事

一 町之年寄月行事ノ其町之子共可致吟味事

一 向後若右之通之儀、於在之は急度可遂僉議事

右之通被仰出、町々年寄月行司判場へ呼寄申渡シ候様ニと惣年寄町代え申聞候、尤八ヶ村えも右之趣申渡させ申候、非人頭共呼
 寄於御番所申渡候、興福寺東大寺下えも可申遣旨被仰出、承仕呼寄申渡候 已上

寅二月七日

〔二〇八〕

覚

一 古金銀を新金銀と引替候儀、当三月表限候様ニと去年四月相触候処、于今古金銀相残在之由ニ候、遠国渡海なと在之所者、通路不自由ニ而引替相残ル義も可有之間、来卯ノ三月を限、不残引替候様ニ御料ハ御代官、私領ハ地頭より其所々ニ申越、古金銀不残引替候様ニ可被申付候、若差支儀於有之ハ萩原近江守方へ可被相達、此上ニ而右金銀残置候へ、可為越度候 已上

寅正月日

如斯御書付出候間、写置之可被得其意候、尤各知行所えも右之趣可被申付候、順廻候而留より奉行所え可被返之候 以上

寅二月廿二日

内伝左衛門

興福寺 東大寺 衆徒 社家 祢宜 衆人

円照寺御所 法華寺殿 十三ヶ寺 十八ヶ寺 廿一ヶ寺

町無知行寺 町中

〔二〇九〕

覚

一 当座遣捨候諸色、金銀箔用候儀停止之事

附、金銀水引停止之事

一 菓子入盆台金銀之箔停止之事

一 童子の持あそび物、遣捨候類、金銀之箔停止之事

一 諸道具金銀梨地粉だび蒔絵之類、向後結構ニ無之様ニ可仕事

一 諸道具金物之類ニ金銀みたりに遣候儀可為無用事

右之趣相守之、惣而無益之儀ニ金銀用申聞敷候 以上

寅三月

右之通從公儀被仰出候間、其旨相守、尤知行所えも急度可被相触候

寅四月五日

妻彦右衛門

興福寺 東大寺 衆徒 社家 祢宜 樂人

円照寺御所 法花寺殿 十三ヶ寺 十八ヶ寺 廿一ヶ寺

町無知行寺 町中

〔二一〇〕

覚

一 今度米倉丹後守殿御用有之、御登候、因茲南都えも御越之由候、為迎罷出候儀并飛札音物等堅可為無用事

一 巡見之所々掃除坏入念候儀無用之事

一 見分之節、其所ニ無之商売物、外より持参仕間敷事

右之通寺社方并町中へも触知者也

寅八月十一日

妻彦右衛門

興福寺 東大寺 十三ヶ寺 十八ヶ寺 廿一ヶ寺

衆徒 社家 祢宜 樂人 町中 町無知行寺

円照寺御所 法花寺殿

〔二一一〕

覚

小湊誕生寺派 日蓮宗

深川 妙栄寺 日泰 四十二

一 年ころ 四十より少内に相見え申候

一 せい 中位

一 かは四角長く 少やりをとがひ

一 髪黒く

一 目 中よりほそく二皮目

一 かほいろ青白く

一 ひけ少々あり

一 惣体中より少ふとりしゝ

右御僉議之事有之由、籠に入置候処、当九月六日火事之節、本所回向院え可罷越旨申渡候得者、何方え参候哉、行衛不相知候間、疑敷者於有之へ留置、早速奉行又へ地頭御代官所え可申出之事

一 当四月八日、伊奈半左衛門御代官品川野畑に八九歳之男子切殺有之候、右切殺候もの有体に可申出之、若及見承候もの於有之者、奉行又へ地頭御代官所へ可申出之事

右兩条隠置後日に協より相知候者可為曲事者也

寅十一月 日

右之趣今度從江戸申来候条、疑敷者於有之者、急度可申出、隠置追而相知候へ、可為曲事者也

興福寺 東大寺 十三ヶ寺 十八ヶ寺 廿一ヶ寺 衆徒 社家 楽人 祢宜 町中井八ヶ村 同無知行寺

円照寺御所 法花寺殿

(二二二)

一 本多能登守領地和州広瀬郡佐味田村之地ニ、歳之頃五六歳ニ相見へ申候女子、兩手を紺色の細帯にて五重くゝり沈め置候処、去月廿四日之曉見出申候、衣類

一 上に花色木綿立嶋わた入

一 中にねすみ色ごばん嶋の木綿袴

一 はたに古き白木綿單物

右之通着し帶いたし不申相果居申候条、村々遂吟味、人主又は右女子捨申もの於有之者、早々可申出、若隱置脇より相知候ハ、本人ハ不及申、其所之庄屋并年寄迄曲事可申付者也

寅十二月二日 南都番所 妻彦右衛門

在江戸 内伝左衛門

触所右之通、十三ヶ所 外に町寺 十五郡

〔二一三〕

一 千代姫君様御違例之处、不被為叶御養生、去ル十日之夜被為遊御逝去候、因茲音曲鳴物普請等可為停止候 以上

寅十二月十七日 妻彦右衛門

御ふれ所如例十三ヶ所

〔二一四〕

一 千代姫君様御逝去ニ付、普請之儀停止被成候へとも其段御免ニ候、音曲鳴物之儀追而御免可被成候間、左様ニ可被相心得候 以上

寅極月十九日 南都番所

右触れ所同事

〔二一五〕

一 千代姫君様御逝去ニ付、鳴物音曲停止之所、今日より御免候間左様ニ可被相心得候 以上

寅十二月廿二日 番所

右ふれ所同事

〔二二六〕

覚

一 大仏殿諸材木入札、於大柴清右衛門方、来ル十五日迄ニ申付候、望之もの於在之へ、右之日限ニ清右衛門方へ参、根帳写取之、入札可被致候、同晦日札披可申事

寅五月六日

奈良町 惣年寄

町代

〔二二七〕

大仏殿諸入札覚

一 諸金物 銅 鉄 唐金

一 塗物 但シ、かき合ぬり、ごふんぬり、ニぬり、黄土ぬり

一 石方足代諸色小買物諸色寫日用

右之通入札申付候間、望之ものへ来ル六月朔日より十日迄之間、大柴清右衛門方迄参、根帳写取可申候間、廿五日札披申候 已上

寅五月廿五日

右之通町中相触候様ニと被仰出、惣年寄町代之御書付写御渡候、一日之通町中相ふれ候様ニ被申渡候

〔二二八〕

一 質物無之して札ニ而質を取申ニ付、数多出入ニ罷成候事

一 米其外之穀物、札ニ而買取質物ニ取引申由、買置同前ニ相聞へ候、因茲穀物高直ニ罷成、輕もの及難儀候

右兩様向後令停止候条、此旨町中へ触しらすへきもの也

元禄十二年卯二月廿九日

右三人之惣年寄ニ相渡シ町中へふれ申様ニと被仰出候ニ付、惣年寄呼よせ申渡候

〔二一九〕

一 林小路具足屋太左衛門、質札紙壳申度之由、去秋ノ数度罷出候、遂吟味候処質やとも差構無之候、因茲質札紙屋ニ申付候、向後質札紙百枚ニ付、銀三分宛ニ買取可用之、尤質屋と不相定輩も右可為同前事

元禄十二年卯二月廿九日

右御ふれ書御出シ被遊候得とも、質札之印出来不申ニ付、今日町中之惣年寄共へ申付相ふれ申候 以上

卯三月四日

〔二二〇〕

定

人売買弥堅令停止之、召仕之下人男女共に年季十ヶ年を限るといへとも、向後年季限無之、譜代に召抱とも可為相对次第之間可存其旨者也、仍如件

元禄十二年卯三月日

奉行

〔二二一〕

口上之覚

一 京都町人渡辺源左衛門・中尾平左衛門、西嶋伊右衛門、小瀬俊照、尾崎七三郎右五人之者、真鍮箔之儀於彼地願相叶候ニ付、

此者共方々当所小西町箔屋茂兵衛と申者之店へ真鍮箔看板出シ度之旨願ニ付指免候事

一 真鍮箔之儀、諸職人勝手次第何によらず可用之、右真鍮箔入用之者へ箔や茂兵衛方におゐて可調之事

一 右箔座五人之者印形無之真鍮箔ハ不可致売買事

右之通奈良町中へ可触知者也

卯六月三日

右之通町代共え口上ニ而申付、奈良町中へ致口触候様ニと被仰出、町代共へ申付候 以上

(二二三)

一 尾張中納言殿御病氣之处、御養生不相叶、当五日被成御逝去候、依之鳴物音曲普請等、今日より十六日迄七日之間、堅可為停止候 以上

卯六月十日 内伝左衛門

十三ヶ所

(二二三)

一 尾張中納言殿御逝去ニ付、鳴物音曲普請等来ル十六日迄七日之停止之旨最前相触候得共、普請之儀は今日を勝手次第第二可被致候 以上

卯六月十三日 南都番所

十三ヶ所

(二二四)

覚

一 頃日時ならず折々火事有之候、前々より申触候通、火之本随分念ヲ入、町之年寄月行司無油断、番人等ニも可申付候、且又若出火之砌あやしきもの見合ニて掘之而申来へし、自然見誤ニ而も其段ハ不苦候事

一 博奕打候ものはしはし有之様ニ相聞え候得共、不慥故いまた不及沙汰候、町之年寄月行司遂吟味、若少之勝負事ニ而も致すもの有之は奉行所え可申出之、如斯申触候上、隱置脇より相知及僉義時は、其時之年寄月行司、其村之庄屋年寄五人組迄可為曲事

一 とたん商之事、前々より令制禁所ニ候、弥以米其外諸色之商売たりと云共とたんの仕形致すへからず、其町之年寄月行司其村々之庄屋年寄五人組より堅可遂吟味候、若相背者有之候におゐてハ本人は不及申、其所之年寄月行司五人組迄越度に可申付事以上

卯六月廿九日

内伝左衛門

十一ヶ所

〔二二五〕

一 有栖川宮、去ル廿五日薨去ニ付、今廿八日明廿九日兩日鳴物音曲令停止者也

卯七月廿八日

内伝左衛門

十三ヶ所

〔二二六〕

一 本庄因幡守殿当月十六日之夜死去、依之今廿六日より来ル廿八日迄、三日之間鳴物令禁止、但シ普請等は可為勝手候 以上

八月廿六日

内伝左衛門 御印なし

十三ヶ所

〔二二七〕

覚

一 今度所々風雨損亡ニ付而、江戸米其外穀類杯可為不足候間、兼而諸国より江戸へ相廻候米穀杯者不及申、其所之用米之外可成分者は江戸へ相廻候様に可被申付事

一 当年より来秋迄諸国之酒造高之内五分一造之、其余は停止可被申付候、巳ノ年造高之儀者来夏中可被相窺事

以上

卯九月日

右之通被仰出候間可被存其旨候、尤各知行所えも可被下知、触狀廻り留より奉行所え可被進之候 以上

九月十一日 内伝左衛門

十三ヶ所

〔二二八〕

一時分柄候間、火之本可入念之旨從江戸被仰付候条、不及申候得共火之用心前々申触候趣を以堅可申付者也

卯九月十一日 内伝左衛門

五ヶ所

〔二二九〕

一 戸田山城守病氣之処、養生不叶、当月十日死去、依之今十七日ヨ来ル十九日迄三日之間鳴物停止申付候、普譜杯は不苦候 以上

卯九月十七日 内伝左衛門

十三ヶ所

〔二三〇〕

当年酒造之儀、五歩一被仰出候得とも、惣中依願其趣妻木彦右衛門之申越御老中へ相窺候処、南都造酒之儀、外之場所とは違候間、去年造高之内三分二造之、三分一は無用可仕候、辰之年之儀ハ来夏中可相伺之旨被仰渡候之間可存其旨者也

元禄拾貳己卯年十月十四日

九月十一日ニ被仰出候ハ、去年酒造高今年ハ五歩一造可申旨、江戸ヨ被仰遣候ニ付、此趣奈良町中酒屋共え申ふれ候様ニ被仰

出、酒屋共え申渡候処、重而酒屋共御願申上候へ、南都之儀へ余国と違、酒布に而渡世仕候、其上先年も諸国酒減少之所、南都之儀は格別と御座候而、願之通ニ而仰付被下候間、此度も何とそ例年之通造酒被仰付被下候様ニ御願申上、因茲御奉行伝左衛門様へ京都御諸司松平紀伊守殿え被仰遣候上ニ而、江戸え被仰遣、妻木彦右衛門様御老中え仰上候ニ付、今日右之御書付を以酒屋ともへ申渡候様ニ被仰出、吟味役讃岐や兵助、岩井九右衛門并奈良町中酒や不残御番所え呼寄、御書付を以申渡候以上

元禄十二己卯年十月十四日

〔三三三〕

常修院宮、去ル朔日薨去ニ付、今七日明八日両日鳴物音曲令停止者也

卯十二月七日 番所

御ふれ所十三ヶ所

右へ京都御町奉行所へ五日之御日付ニ而、宮様薨去ニ付二日三日四日都合三日、鳴物音曲停止ニ被仰付候由、此節伝左衛門様御上京ニ而御留守ニ付、飯塚弥兵衛并与力相談之上、右之通相触申候 以上

卯十二月七日

〔三三三〕

鷹司前殿下就薨去、今十三日より明十四日之夜迄二日之間、鳴物令停止之候、但シ普請杯は不苦候間可為勝手次第候 以上

元禄十三辰正月十三日

十三ヶ所

〔三三三〕

大猷院様五十年御忌 嚴有院様廿一年御忌

覚

一 四月五月拷問手鎖或者牢舎縄掛候類之儀者無用候

但兩御法事初日中日結願日、此三ヶ日諸事停止

一 兩度之御法事中普請鳴物祭礼法事等不及相止候

四月御法事

初日 六日 中日 十日 結願 十五日

五月御法事

初日 四月廿六日 中日 五月朔日 結願 六日

右之通從江戸被仰遣候 以上

四月五日

右之通写候而、興福寺東大寺へ遣候様ニと被仰田、写仕、兩寺承仕よひ申由書遣候 以上

四月六日

〔三三三〕

一 出火之節、用ニも無之者罷出、小路を指塞候ニ付、前々より役人之外用事無之もの罷出候儀堅令停止候処、殊外猥罷成、刀帶

見物之者も多妨有之候間、用事無之ものむさと罷出候儀、弥以向後令停止候、此旨相背、うろたへ歩行候者於有之は、急度相改
弥搦捕候様申付候間、面々支配所召仕等ニ至迄、急度可被申付者也

辰六月廿二日

興福寺五師 摩尼珠院 役者 千手院 十三ヶ寺 伝香寺 崇徳寺 称名寺 眉間寺 般若寺 衆人 久保 伊賀 衆徒
社家称宜えハ五師役者かうつし渡候様ニと申渡候

〔二三五〕

- 一 井戸有之家ハ表ニ井在之印張札可仕事
- 一 井戸ニ井筒無之分ハ向後井垣二尺程ニ可仕事、但手前不成者ハ竹垣ニ而も念入可仕事
- 一 火事之節用無之者、火事場え出申間敷候、自然見物ニ出申者有之候ハ、搦捕、御改之上、急度可被仰付候 以上

〔二三六〕

覚

当年酒造之儀、委細追而可申渡候間、夫迄通酒造り不申候様ニ可申付候 以上

七月

右之趣、江戸ハ申来候間、其旨酒屋中え可申渡候 以上

辰七月十四日

讃岐兵助

岩井九右衛門

右之趣、月番惣年寄徳田勘兵衛町代共えも申聞セ置候様ニと友右衛門申ニ付、呼寄申聞セ

〔二三七〕

佐久間町片町 正阿弥

八郎兵衛 年三十三

- 一 せい中の男、やセかたち
- 一 まなこ丸く、少出目
- 一 面体少おもなか、鼻筋
- 一 眉毛あつく、耳少長し
- 一 口ひつうとく、齒小齒に而そろひ

一 ひん中くらひ

一 さかやきの内右之方ニ五歩斗はけ有、惣体月額うすはけ

一 左の腕に万命と入ほくろ有

一 手足しんしゃう、但両足ひさふしより下にしつの跡有

一 右之もの初之名甚右衛門と申、其後八郎兵衛、又源右衛門と改候

一 衣類定数に爪を付候

佐久間町四丁目忠兵衛店

権左衛門方ニ居候 権右衛門 年三十五

一 せい中のおとこ、やせかたち

一 顔おもなか、いろ少あかく、鼻筋通り、眼ほそく、目尻少つり

一 髻中月額の中ほと少うすく有之候

一 生平かたひら、紋丸の内薦、但、丸のさしわたし金尺にて沓寸、紋の色かきにて有之、洗はけ候様ニ候

一 脇差長一尺六寸ほと、黒鞘、柄黒茶さめしろ、鍔鉄無地、ふち赤銅

一 帯絹、色黄から茶

一 鼻紙袋地琥珀織、色すゝたけ、かくしぼたんへつかう、二所ニ有り

右二人のものの御僉議有之処、八郎兵衛ハ当六月十四日、権右衛門ハ同十六日ニかけ落いたし候、右書付之通りのもの於有之ハ其所に留置之、奉行又ハ地頭御代官へ申出、それより江戸町奉行所へ早速可申達、若かくし置、後日にわきより相しれ候ハ、可為越度もの也

辰七月日

右之趣今度江戸へ申来候条、面々支配知行所へも相ふれ、疑敷もの於有之早々可申候、隠置わきより相しれ候ハ、急度可申付候もの也

辰七月十六日

妻彦右衛門

十三ヶ所

〔二三八〕

覚

捨子之儀御制禁候、依之最前も養育成かたきにおゐてハ、奉公人ハ其主人、御料ハ御代官、私領ハ其村々名主五人組、但町方ハ其所之名主五人組え其品を申出之、於其所養育可仕旨相触候処、今以粗捨子いたし候段不届ニ候、若捨子いたし候ハ、可為曲事候、弥捨子不仕様ニ急度可被申付候 以上

辰七月日

右之趣、今度從江戸申来候条、面々支配知行所えも相触此旨、急度可相守者也

辰八月三日

妻彦右衛門

ふれ所 十三ヶ所

〔二三九〕

覚

惣而生魚商売之儀、最前より停止被仰出候、うなぎ・どちやうも生魚之事候間、向後商売停止候、若此已後売候者於在之者可為曲事候、其所之名主五人組迄越度ニ候条、右之趣急度可申渡候 以上

辰七月廿三日

右之御書付、從江戸出来候条、面々知行所へ可被触知もの也

辰八月十三日

妻彦右衛門

十三ヶ所

〔二四〇〕

辰九月廿六日酒造之儀、從江戸被仰遣候御書付之趣、曾根友右衛門を以被仰出、当地酒改役人并当町酒やとも不殘呼寄申渡候御書付之趣

覚

於南都、当辰年酒造米之儀、去々寅之年造米員數之通造候様ニ可被申付候 以上

辰九月十九日

〔二四一〕

尾張大納言殿去ル十六日御逝去、依之鳴物音曲令停止候、日數之儀追而相触候迄其旨可被相心得者也

辰九月廿一日

妻彦右衛門

以上 十三ヶ所

〔二四二〕

尾張大納言殿御逝去、鳴物音曲令停止候處、今日より致赦免候間、此旨可相心得候 以上

辰十月廿六日

妻彦右衛門

以上十三ヶ所

〔二四三〕

水戸中納言殿御病氣之處、御養生不相叶、去ル六日ニ御逝去被成候、因茲来ル十九日迄鳴物音曲令停止者也

辰十二月十四日

妻彦右衛門

以上十三ヶ所

〔二四四〕

覚

一 銀子之儀、御蔵元払金老兩ニ付銀六十目替之積ニ在之候、然共兩替屋共指引利潤多有之候条、金老兩ニ付銀五十八匁六十目迄通用之可仕事

一 銀之儀、御蔵元払金老兩ニ付錢四貫文替之積ニ候間、金老兩ニ付錢四貫文替之積ニ可相心得候、是又兩替や差引可在之候間、三貫九百文より四貫文迄通用可仕事

右兩様当年ヨリ来巳ノ十二月迄、金銀錢右之直段ニ可相心得候、若相背もの於在之候へ急度可申付也

辰十二月廿日

妻彦右衛門

以上十三ヶ所

〔二四五〕

内田伝左衛門、依願去月廿二日、当役儀御免、為跡役廿八日横山左門被仰付候間、為被知如此候 以上

元禄十四 巳三月七日

南都番所

九ヶ所 興福寺東大寺へハ各別被仰遣候 町かたへも別ニ当旨申遣候

〔二四六〕

東大寺龍松院御呼寄、大仏殿修造之御書付御渡被遣候

覚

一 南都大仏堂修造之儀、延々ニ成、先達而用意致候品々も朽損候付、私領方勸金も御領ニ相準度旨、此度龍松院願候、其通相叶、当年来年在々々勸金取立、我等共へ相渡管ニ候、依之寺社奉行并萩原近江守横山左門えも於江戸被仰渡候

一 右大仏堂普請之儀、我等共へ被仰付候、尤下奉行与力同心相勤候様ニ是又被仰出候

右之趣、御老中へ被仰遣候由ニ而、松平紀伊守殿へ去ル十八日ニ申来候、以上

已三月廿日

妻木彦右衛門

〔二四七〕

申渡覚

一 町々家質二重ニ入候ニ付、為吟味町代加判先年申付候、然処水引跡目之儀ニ付出入有之候、因茲向後家屋舗売買證文町代永嶋弥次兵衛印形を加、出入無之様申付候、弥次兵衛為請銀と買主方より銀百目ニ付銀沓宛宛遣可申事
右之趣町中触可知者也

元禄十四辛巳四月四日

右は町代平右衛門世倅弥次兵衛儀、別家ニ罷有、御番所之御用諸事、町代共並ニ毎日罷出相勤申候、平右衛門弥次兵衛親子共ニ手前不如意ニ御座候而迷惑仕候ニ付、当町中家屋舗売買之節、吟味加判人ニ弥次兵衛被仰付、為其判料銀百目ニ付沓宛宛買主より出シ、弥次兵衛ニ被下置候様ニ奉願上候、右之銀子出候得而さのミ町中之差構ニも成申間敷候、何とそ為御救右之通被仰付被下候様ニと、惣年寄共先月廿九日以書付を御願申上候ニ付、今日右之通御書付を以被仰出、当町中え触知候様ニ惣年寄并町代共えも可申渡旨御意ニ付、則御書付惣年寄三人え相渡申候、尤向後家屋舗売買仕候節、町ニ而之参会此外入用等輕仕候様ニ入念触候様ニと惣年寄町代共え申渡候 以上

〔二四八〕

定

一 従公儀被建置御高札之趣并切死丹宗門之儀、弥以可穿鑿事
一 従先規度々被仰出御法度書、常々致吟味、堅可相守事
一 従前々被仰出候生類憐之儀、弥相守可申事
一 火之用心無懈怠可慎、風吹申節者猶更無油断可相触之、若火事出来之時者、其一町并隣町之者かけ付鎮之、其役之者早速馳集、入情可済之、不參於在之者或者籠舎可為過料、但風下之分者可令用捨事
附、町人百姓等、刀脇差を帶、火事場え不可出、若不審成者在之ハ相改、及異儀者可搦捕之、武士者役人之外不可出向事

一 喧嘩口論又者盜賊人等在之節は、不限昼夜早速可申來事

附、於町中狼藉もの之者奉行所え可相達事

一 博奕其外賭之諸勝負、堅令停止之、若相背者在之者、其連中并宿主家屋敷可為欠所、親懸り之者ハ親之家可令欠所、親於申出ルニハ親之家不及欠所、右当人者死罪或者籠舎追放、科之可依輕重事

附、宿之兩隣五人組可為越度之間、見聞次第可申出事

一 屋作衣類杯美麗を好不致結構、私之奢不可仕、并嫁娶之儀応其分限、祝儀取替し又者諸道具等輕可仕事

一 諸寺院町屋を借り寺法修行吊杯仕儀、堅令停止之、但、元禄五申年五月敝有院樣就御法事新地御免被仰出候、其後取建寺院者停止之事

一 神事祭礼并仏事法事吊之儀、仮初にも不好美麗、万端可致省略、若過分之振舞在之者曲事可申付事

一 借屋之者念入、家可借之、勿論從他国來店借、他町より來店借、独身之者迄、由來を正し、店請証人慥に立、手形を取可借之、請人なくして一夜之宿も不可借、縦ひ雖請人在之、不慥と及見ハ宿借すへからず、但、旅簷屋之分ハ一夜之宿不苦、二夜とも宿いたすにおゐてハ、請人を取、其趣町之年寄五人組え可相断事

附、他町え宿替者あらハ落着所を正し、日用取といふとも手形取之、大屋名主に申達可差置事

一 家屋敷売買之儀、其町之年寄五人組達之可相定、縦売券狀雖在之、町代弥兵衛并年寄五人組猶無加判は不可立證文事

附、買論之事、売主と相究、町之年寄五人組え断申達上は先次第たるへし、若年寄致依怙は可為曲事

一 家屋舖賣物に入候節は、年寄五人組其町触口之町代可加印、於無之は證文不可立事

一 牢人之儀、念入手形取之可差置、新規之牢人令居住時は其子細書付可申來、若隠し置者在之は可処罪科事

一 就諸商売珍敷儀或ハ座かましき事、或ハ隱密之商売もの一所買置、しめ売杯一切令停止之、若違犯之輩あらは当人ハ不及申、其町之年寄五人組月行司迄可為曲事間、常々可致吟味、しかりといへとも其所の助に可成儀は可訴之、子細聞届可申付事

一 問屋之身軀能聞届互に商売すへし、無念仕むさと売懸滞儀在之而致訴訟といふとも、品により不可令裁許、且又問屋其外諸商人何によらず商物取込、其代銀不相済見届さるもの有之へ、其町之年寄五人組親類縁者立合遂穿鑿、出入にならざる様に可仕、

評論成におゐてハ可為越度、下ニ而不相濟儀ハ其趣可訴之事

一 讓狀之事、夫妻之親類所々名主年寄之名を驗し、以後不成評論様に可致覚悟、若又急に指詰書付難成におゐてハ、五人組中ケ間を以名主ニ達し、有合候親類縁者立合、道理分明におゐてハ可任其意、非儀成申分取上ケ間敷事

一 質屋之儀、慥成証人立之、盜物不取置様に急度可遂吟味、あやしきもの於持来者、其人之出所慥可承届置、盜物乱に請取置者在之者可為曲事

一 古衣類又ハ道具之類、於途中売買一切不可仕、若盜物としりながら買取候ハ、可処嚴科事

一 傾城町家居不致美麗、女衣類抔美々敷不可致、尤昼夜共に他行可令停止、見届ざるもの来にをゐてハ早々可致注進事

附、傾城町にをゐて喧嘩、死人在之候とも、死損たるべき事

一 町人に不似合長脇差、たて染之衣類を着し、風俗あやしきもの、又ハ不致商売も渡世仕、不審なる者在之者、早々名主大屋遂吟味、奉行所え可申出事

一 町中にて寄合之節毎輕、費にならざる様にいたし、請事依怙最負なく、正路に可令沙汰、若非儀申懸もの之者、其冒趣奉行所え可申来事

一 町中道橋於損ハ可加修覆、往来迷惑いたさすへからず、常々掃除水道等念を入可申付事

元禄十四辛巳年六月

横左門

妻彦右衛門

奈良町 惣年寄

町代

〔二四九〕

条々

一 吉野山寺僧は天台、満堂社僧ハ真言ニ而、両宗入交之山候間、寺社并町人百姓公事訴訟有之節ハ、法式之外之儀は学頭不差挿之、吉野郡御代官え直訴之、奈良奉行御代官相談之上裁判可有之、乍然一山日光御門跡御支配之事候得は、一通り学頭え相届御

代官え可罷出候、御代官より裁許之趣學頭えも通達可有之候、了簡も候は學頭も申達之、滯儀候は御代官が寺社奉行え可相達事
 一 法式之儀、寺僧方斗之事ハ學頭了簡之上申付之、滯儀ハ御門跡え可申達之、満堂社僧入交候事候、學頭一分として不申付、奈良奉行え相談仕可申之、滯儀有之ハ是又寺社奉行え可訴之事
 一 公儀より御触抔有之節ハ、奈良奉行御代官より學頭え申達、學頭が寺社并町人百姓抔迄触させ可申候、若滯儀候は両所之内え可承合事

一 高札ハ御代官より可立之、併名書は無之、奉行と斗可有事

一 宗旨改之儀、御代官學頭立合、學頭方ニ而相改、尤奈良奉行えも相談可有事

一 修理料之儀、寛文十一年裁許之通、寺僧満堂立合相對を附願之、勘定之儀、年番之兩宗ニ學頭代立合、御代官ニ而可令吟味、滯儀有之は奈良奉行えも可有相談事

一 寺僧満堂社僧神主称宜抔ニ至迄、定式之勤行不可懈怠事

一 山中不依何事新規之儀堅可為停止候、不仕して不叶わけも候は學頭え申断、奈良奉行御代官え通達之上、寺社奉行え可伺之、惣而於一山非儀非例之事有之ハ、早速南都え可訴之

附、真言宗法流之本寺護持院え被仰付候条、法流之儀は護持院より差引可有之事

一 一山之儀は御門跡御支配と前々より被仰付候間、末々迄可相守御下知候、然上は向後奈良奉行御代官學頭相談之上可申付候条可存其旨事

右此旨堅可相守者也

元禄十四年十二月廿五日

阿飛驒

永伊賀

松日向

青播磨

丹後

別紙同文書
社僧 満堂 寺僧中 豊後 相模 佐渡 但馬